

# わたしの聖戦

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

連 228 載

## 認知症の世界

今や日本は世界でも有数の長寿社会になり、65歳以上の認知症の人は数百万人存在するといわれる。しかも高齢社会はしばらく続くため、今後は、私もあなたも誰もが、認知症を抱える時代がやってくる。

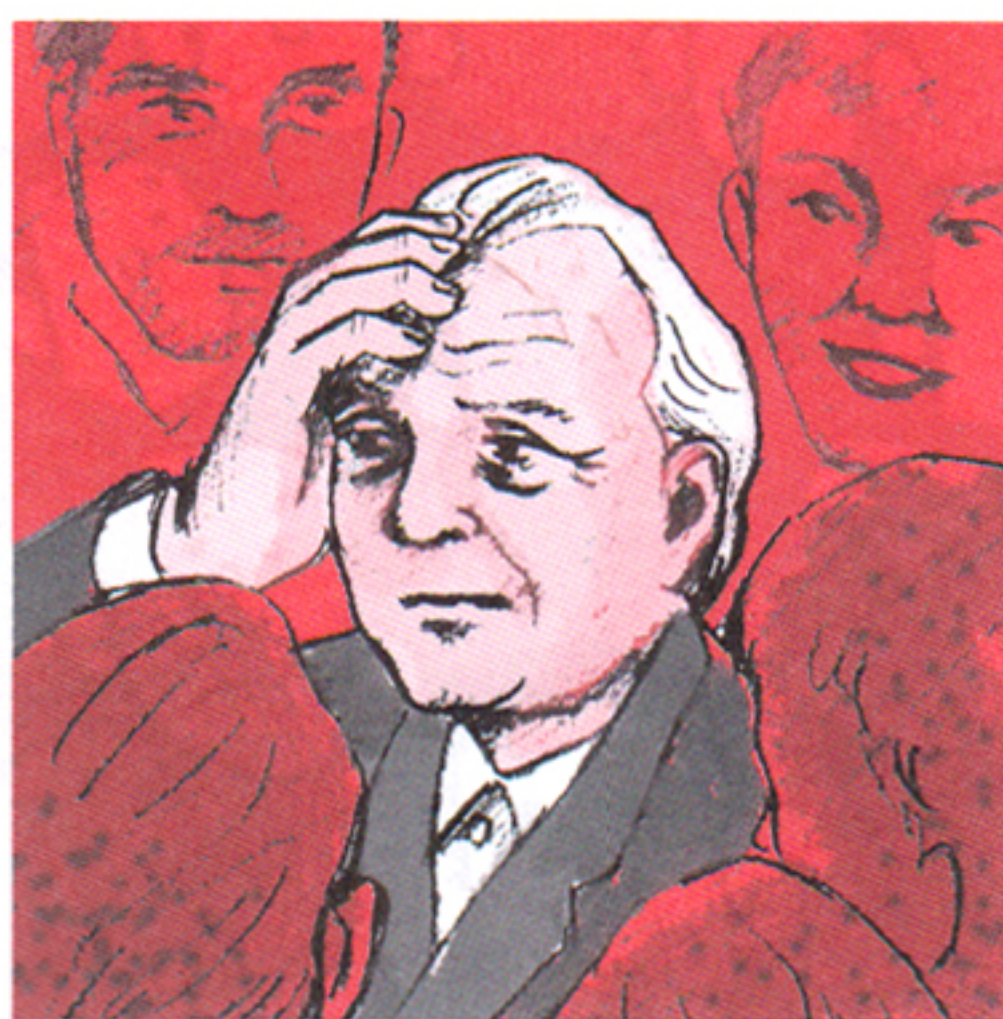
病気のことはその病気にならないとわからない。がんについていくら研究しても、がんになつた人の気持ちや治療のつらさはそのときになってみると、所詮「ひとごと」としてしかとらえることはできない。しかしがんなら、がんを克服して社会生活を送る人は周囲にもたくさんいるので、体験談を聞くことができ、

ある程度想像がつく。ところが、認知症となると

認知機能が低下している相手から正確な情報を得ることは難しいと思ってしまう、認知症でない人からすれば得体のしれない病気ということになる。認知症になつたら、何もわからなくなるのだから、楽だといった声もあるが、とんでもないことだ。そんな間違つた認識を正してくれたのが、クリステイン・ボーデンという女性である。

クリステインはイギリス人。優秀な官僚でありながら、46歳でアルツハイマー病の診断を受ける。何だかおかしい、と自覚し始めたころのこと

や診断を受けて以後のことを書物にしたためた。2003年に邦訳された「わたしは誰になつていくの?—アルツハイマー病者からみた世界」がそれだ。この本は、世界に衝撃を与えた。「認知症」何もわからなくなつていく病気」という図式をやすやすと覆し、認知



症の人が何を考えどうやって生活が続いているのかという貴重な情報を彼女は示してくれたのだ。本を書き、講演をする。本当にあなたは認知症なの? と疑いの言葉をかけられたことはしよつちゆうだ。しかも、クリステインは、病気がわか

つてから結婚もし、2004年には続編「私は私になつていく—認知症とダンスを」の出版も実現させている。

しかし、この本を読めばわかる。認知症の辛さ、しんどさが。そしてなぜ私が? という答えのない問いは常につきまとう。それでもこの本はすべての人に勇気を与えてくれた。

アンソニー・ホプキンス主演の「ファーザー」を観た。認知症になつたアンソニーが主演の映画である。これまでの認知症の映画といえば、本人の苦悩とともに周囲の人々との関わり、病気の進行などが中心だった。ところがこの映画は最初から最後までアンソニーの視点で描かれる。つまり、認知症患者からみたこの世界—家族、施設、施設スタッフ—が描かれているのだ。住んでいるのは、あくまで自分の豪勢な家。し

かし時々見知らぬ男が現われる。娘の夫だというが、アンソニーには見覚えがない。夫と名乗る男には不信感しかない。娘の顔が時々別人に見える。これは誰だ? :

新しくやってきた介護士は、若くて可愛らしくて、次女にそっくりだ。アンソニーの心は少し華やぐが、次の日にきた介護士は似ても似つかない中年女性。これは何だ? :

観客は、アンソニーと同じ目線で物事を見るため、映画はもはやホラーかサスペンスだ。

ラスト、真実が分かつたとき、私たちは少しだけ認知症の人を理解できているかもしれない。アンソニーはこの役でアカデミー主演男優賞を受賞した。「晩年の父親の真似をしただけ」と彼は述べた。明日の自分を突きつけられる映画。観るには少し勇気が必要かもしれない。

イラスト・伊藤香澄